

つくば市未来構想改定

中間取りまとめ案（概要版）

つくば市では、平成30年度(2018年度)～令和元年度(2019年度)にかけて「つくば市未来構想」及び「つくば市戦略プラン」の改定・策定を行っており、未来構想等の改定に関する中間取りまとめ案を作成しました。

今後、中間取りまとめをもとに「つくば市戦略プラン」を策定し、具体的な戦略を定めます。なお、戦略の策定に当たり、中間取りまとめも必要に応じて適宜見直しを行うものとし、令和元年度(2019年度)内に「つくば市未来構想」及び「つくば市戦略プラン」を策定する予定です。

つくば市



構想の目的・構成・期間

1 改定の背景・目的

社会・経済等の情勢変化に対応し、諸課題を克服しながら次の世代に継承・発展させていく「持続可能都市」を目指し、2015年度に策定した「つくば市未来構想」を改定

2 改定・策定のポイント

過去からのフォアキャスティングと
目指す未来からのバックキャスティングで策定

3 構成および計画期間

■ 構成

未来構想(理念等)+戦略プラン(施策等)

■ 計画期間

・未来構想：21世紀半ばまで

・戦略プラン：2020年度～2024年度

目指すまちの姿と、**2030年の未来像**を示し、
実現に向けた今後5年間の戦略・取組を定めます。

社会情勢等

時代の潮流・我が国の動向

- ・ 少子・高齢化の進行とまち・ひと・しごと創生
- ・ ボーダレス化の進行
- ・ A I ・ I o Tなどの科学技術の進展
- ・ ライフスタイルの多様化
- ・ 地球規模での環境問題への対応
- ・ 安全・安心意識の高まり
- ・ 市民参加・民間との新たな協働
- ・ 自治体の持続可能性・S D G sへの取組



つくば市で求められる対応

- しごととひとの好循環づくり
- 多様性を受け入れる風土づくり
- 科学技術を活用した課題解決や産業振興
- 自分らしく生きられるためのまちづくり
- 環境意識を高め、環境保全に対する取組や、既存の概念にとらわれない新しい取組も必要
- 生活インフラの予防的補修や計画的更新
- 市民参加の機会拡大、民間活力の活用
- 経済・社会・環境の調和がとれた一体的な向上

第3章 地域特性

1 つくば市の強みと弱み

強み

- ✓ 自然環境に恵まれたまち
- ✓ 科学のまち・研究学園都市
- ✓ 各種交通網と交通結節点
- ✓ 多様な人材とその循環
- ✓ 多様な学校・教育施設と人材育成

弱み

- ✓ 広い市域と中心市街地・既成市街地の賑わい低下
- ✓ 市町村合併による一体感の不足やコミュニティの希薄化
- ✓ 産業構造と市税収入における課題
- ✓ 生活インフラの更新・新設と空き地・空き家の増加

- 子育て世代や意欲・アイデアのある人・企業を呼び込むことで、中心市街地・既成市街地の賑わい低下やコミュニティの希薄化、農業の後継者不足などのリスクを回避する。
- 科学技術の集積や多様な人材をまちづくりの課題解決や産業集積に繋げることで、効果的・効率的な生活インフラの維持・管理や高齢者等の移動手段の確保、稼げる産業の育成・創出などの地域活性化につなげることが期待できる。

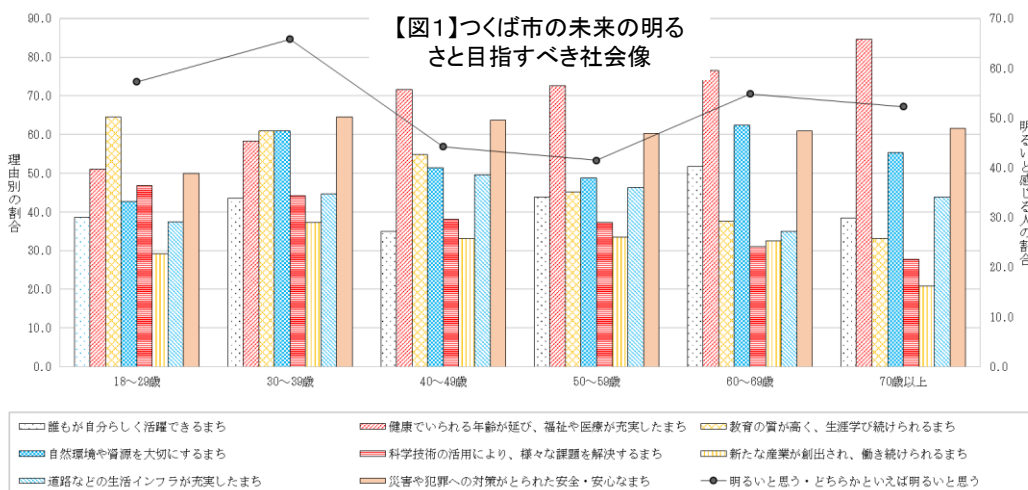
2 SDGsの取組とつくば市の施策・事務事業の特性

SDGsとつくば市のこれまでの取組との関係を見ると…

- 「ゴール4質の高い教育をみんなに」、「ゴール11住み続けられるまちづくりを」などに関連する分野の事業が進んでいる
- 「ゴール15陸の豊かさを守ろう」や「ゴール12つくる責任つかう責任」などに関連する分野の事業が遅れている

第4章 市民の声

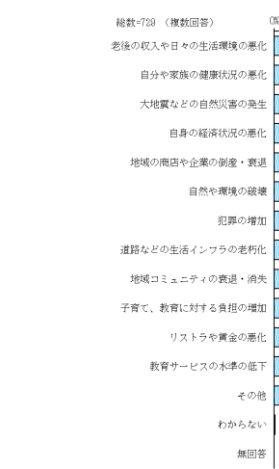
「健康・福祉・医療」、「防災・防犯」、「自然・資源保全」に関するニーズが高くなっています。若年層は「教育」に関するニーズが高くなっています。



- 重要度は高いが満足度の低い取組として以下があげられ、市の取組として注力していくことが期待されています。
- ・ 高齢者・障害者支援
 - ・ 妊娠・出産環境
 - ・ 農業振興
 - ・ 公共施設等の跡地活用
 - ・ 環境保全・地球温暖化対策の推進
 - ・ 資源循環型社会の推進
 - ・ 障害者の地域生活支援

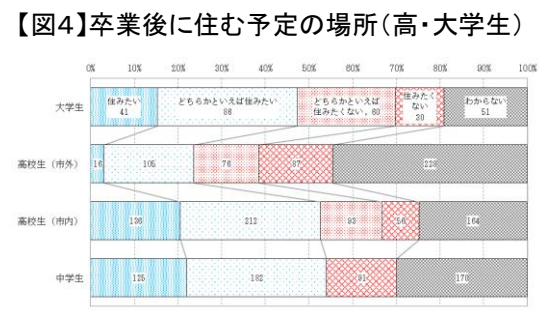
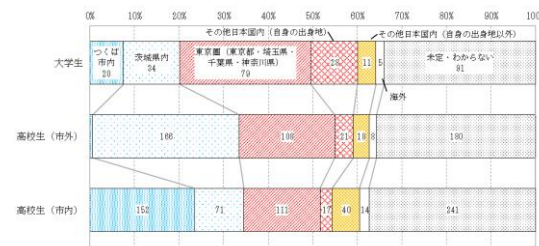
重要度も満足度も高い取組である、居住環境、教育、中心市街地・TX沿線の活性化の取組については、つくば市の強みといえます。

老後の生活や健康、災害などの将来の予測が難しいことに対する不安が強く、これらに対応することが、誰一人取り残さない安心のまちづくりには重要となります。



【図2】未来に対して不安なこと(市民)

大学生の約3割が卒業後は東京圏に住む予定としている一方、半数近くがつくば市に「住みたい」「どちらかといえば住みたい」と回答しており、市内に就業の場が確保することで、大学卒業後のつくば市への定住につながる事が期待できます。



【図5】つくば市に住み続ける可能性(中・高・大学生)

第5章

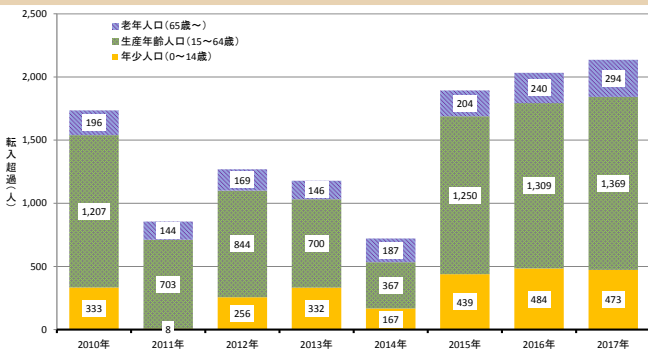
人口・財政の現状と推計フレーム

1 つくば市の人口

市内の人口は、転入超過が進み、また、合計特殊出生率は回復傾向です。

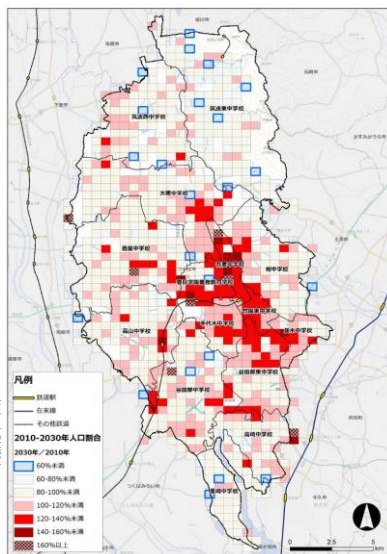
一定規模の人口を中長期的に維持していくためには、引き続きファミリー層などの転入を進めるとともに、出生率のさらなる向上が必要です。

市内の高齢者率は全国平均よりも低ですが、2030年には約25%、2040年には約30%と着実に増加する見込みです。今から高齢者が長く健康に社会で活躍できる環境づくりを進めることが必要です。



【図6】年齢階級別の人口移動の状況

また、特に高齢化や人口減少が進む郊外部では、単身高齢者の増加や人口密度の低下による賑わいの喪失、空き地・空き家の増加等への対応が求められます。

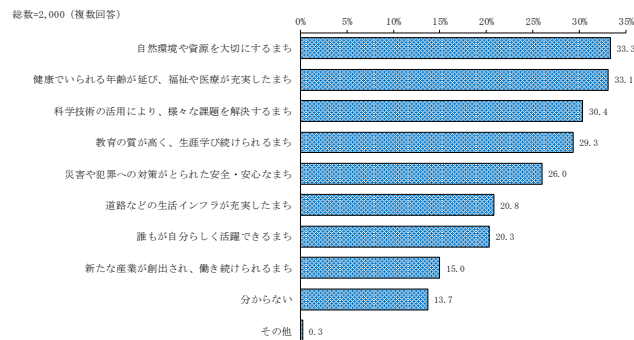


【図8】2010年-2030年地域別人口増減数

2 関係人口※

※「関係人口」とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる者をいいます。

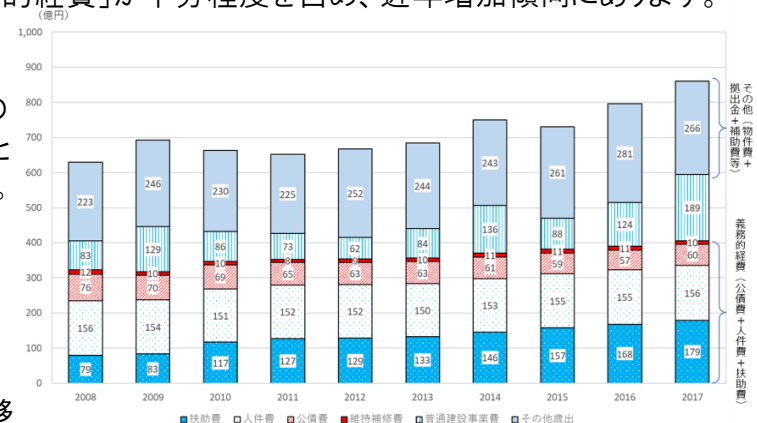
つくば市を訪れる地域外の方は、つくば市の将来として「自然環境や資源を大切にするまち」と「福祉や医療が充実したまち」を挙げており、次いで、「科学技術の活用により、様々な課題を解決するまち」「教育の質が高く、生涯学び続けられるまち」が続いており、未来構想の取組みを通じて実現することが望まれます。



【図9】つくば市が将来どのようなまちになってほしいか

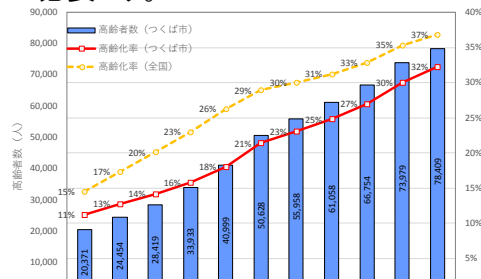
3 財政の現状

歳入は、税収が増加傾向であり、内訳は個人市民税と固定資産税・都市計画税の割合が多いのが特徴です。歳出は、扶助費・人件費・公債費を示す「義務的経費」が半分程度を占め、近年増加傾向にあります。子育て、教育、健康・医療などの経費である扶助費の増加が主な要因として考えられます。



【図10】歳出の推移

【図7】高齢者人口の将来推計



まちづくりの理念及び目指すまちの姿

＜基本理念＞ つながりを力に未来をつくる

➤顔と顔が見える

多様なコミュニティの中で、顔と顔が見えるつながりをつくり、

➤挑戦を応援する

イノベーションを目指す挑戦者を応援し、挑戦を身近に感じながら次世代を担う子どもたちが成長することで、新たなまちの活力を生み出し、

➤未来をつくる

だれもが幸せを感じる未来をつくり、さらなる好循環を生み出すことで、まちを持続的に発展させていきます。

＜目指すまちの姿＞

I 誰もが取り残されず、自分らしく生きるまち

誰一人取り残されないよう、年齢、性別、国籍、個性などによらず、人間一人ひとりの安心が守られ、地域の隅々まで福祉がいきわたり、つくばに集うすべての人が自分らしく生き、自然豊かで幸せがあふれるまち。

II 未来をつくる人が育つまち

公正・公平や平和などの価値を大切にし、自分と他者、社会、自然との関係性を認識し、持続可能な地域と世界を構築するために自ら考え、働きかけ、変革を起こす人材が育つまち。

III 科学技術で人が豊かになるまち

科学技術の進歩が市民の日々の生活や地球環境に恩恵を与えるよう、限界を認識しながらも先駆的に活かし、人類共通の課題の解決に貢献するとともに社会にイノベーションを生み出すまち。

IV 魅力を共に創るまち

開かれた環境のもと、市民が中心となり、議会、地域団体、大学・研究機関、企業、行政などの顔と顔が見え、人と人がつながり、つくばならではの魅力を高め、世界に示すまち。

まちづくりの理念及び目指すまちの姿

目指すまちの姿と2030年の未来像

I 誰もが取り残されず、自分らしく生きるまち

～2030年の未来像～

- 様々なコミュニティによる支え合いの中で、充実した医療や介護、必要な目配りや支援などの頼れる福祉が地域に行き届いています。
- 一人ひとりが健康を大事にしながら、様々な場面で社会に参画し、生涯現役で活躍しています。
- 地域で連携しながら日頃からの防災・防犯の準備や教育を行うとともに、公共施設やインフラを長期的視野で維持管理することで、誰もが安全・安心な生活を送っています。
- 筑波山などの美しい景観や豊かで多様な生態系により、多くの人々が自然の恩恵を実感しながら自然を守り育てる意識を持って生活しています。

II 未来をつくる人が育つまち

～2030年の未来像～

- 充実した子育て環境とともに、創意工夫にあふれた様々な遊びの機会が街中にあふれ、親子が一緒に楽しみながら成長しています。
- 子どもたちは、自分の好きなことを見つけ、個性を伸ばしながら、未来を切り拓いていく力を育んでいます。
- 性別、国籍、年齢等を問わず、自身や他者の選択を尊重し合う多様性に寛容な文化が地域に根付いています。
- あらゆる分野のチャレンジを応援することで、チャレンジの連鎖が生まれるとともに、次の世代の成長を引き出しています。

III 科学技術で人が豊かになるまち

～2030年の未来像～

- 最先端の科学技術の知識・経験を有する才能が世界中から集まり、社会との対話を通じながら、新しい未来を切り拓く社会イノベーションを創出しています。
- 研究成果をいかした新産業の創出や地域企業等における科学技術の活用が進むとともに、社会や環境と調和しながら地元企業等が持続的に成長するモデルが地域に浸透しています。
- インフラの維持・更新等の社会課題解決や、誰もが簡単かつ自由に移動できるモビリティ等の新しい社会システムの導入など、科学技術で街全体が進化しながら誰もが豊かな生活を送っています。
- 市民一人ひとりが地球や環境に優しい選択を大切にし、自分ができる身近なことから取組むとともに、地域で最適な生産や消費、再資源化、再利用等を進めることで、「ごみ」という言葉がなくなっています。

IV 魅力を共に創るまち

～2030年の未来像～

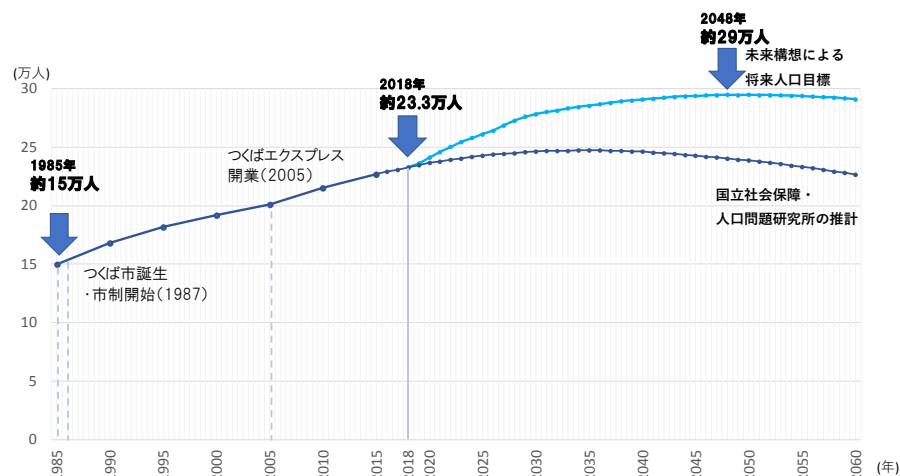
- 市民一人ひとりが自分の街への愛着や誇りを持ち、社会・経済・環境の関係性を考えながら意見を交わし、自ら行動することで、市民が中心となったまちづくりが進んでいます。
- アイデアや意欲のある人材が集まり、つくばの資産と新たなセンスが融合することで、文化・芸術、スポーツ、観光、商工業、農業などの新しい魅力を創り出しています。
- 公園の中に街があるような緑豊かなゆとりある街並みや、つくばでしか体験できないコトが街中に散りばめられ、世界中から人を惹きつける魅力的なまちになっています。

第7章 人口ビジョン

1 人口の将来展望

人口のピークを大きくし、遅らせ、かつ維持していくためには、社会増と自然増の両方で積極的な政策を行っていく必要があります。つくば市は、まちづくりの基本理念のもと、目指すまちの姿に向けて、地域の強みを活かした取組を進めることで、2048年に約29万人のピークを迎える人口ビジョンを目指します。

目標人口は、これまでの人口推移や沿線の市街地開発等をふまえ、各開発地区での定着見込みについて考慮します。加えて、人口のピークを大きくし、遅らせ、かつ人口を維持していくためには社会増と自然増の両方で積極的な政策を行っていく必要があることから、定着人口の維持および自然増加として、合計特殊出生率が2030年に1.8、2040年に2.1に向上すると仮定して推計します。



【図11】人口の将来展望

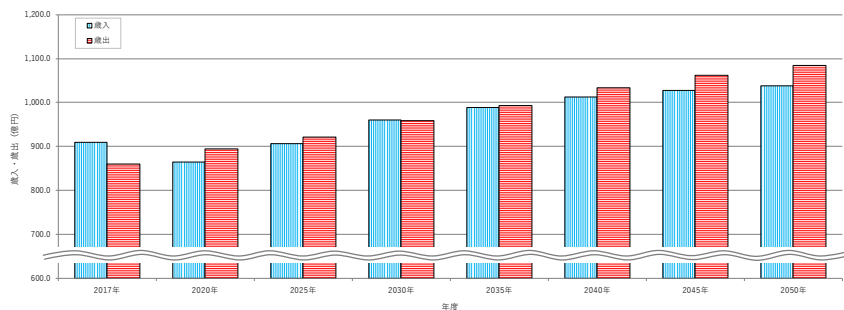
2 財政の将来展望

社人研の人口推計をもとに行った財政見通しと比較して、総人口が増加することで市民税、固定資産税、国庫支出金等の歳入が増加することで歳入と歳出のバランスが改善され、2030年頃まで均衡がとれていることが分かります。一方で、高齢化率が高まることに伴う扶助費の増加等の影響で2035年以降に歳出が歳入を上回る状況が推測されることから、行財政改革に関わる不断の努力が必要です。

※歳出が歳入を上回る状況について

平成30年度(2018年度)現在、つくば市は地方交付税の不交付団体であることに加え、将来にわたる交付税の交付額の算定が難しいことから、歳入には交付税が含まれておりません。よって、歳出が歳入を上回る状況となった場合、交付税による調整が期待されます。

しかし、地方交付税交付金の対象として市の政策的な投資に関する歳出が基本的に含まれないことから、政策の自由度が低下する事態になることが懸念され、今後は歳入・財源の確保と歳出の抑制が求められています。



【図12】財政の将来見通し

土地利用構想

1 土地利用の基本理念

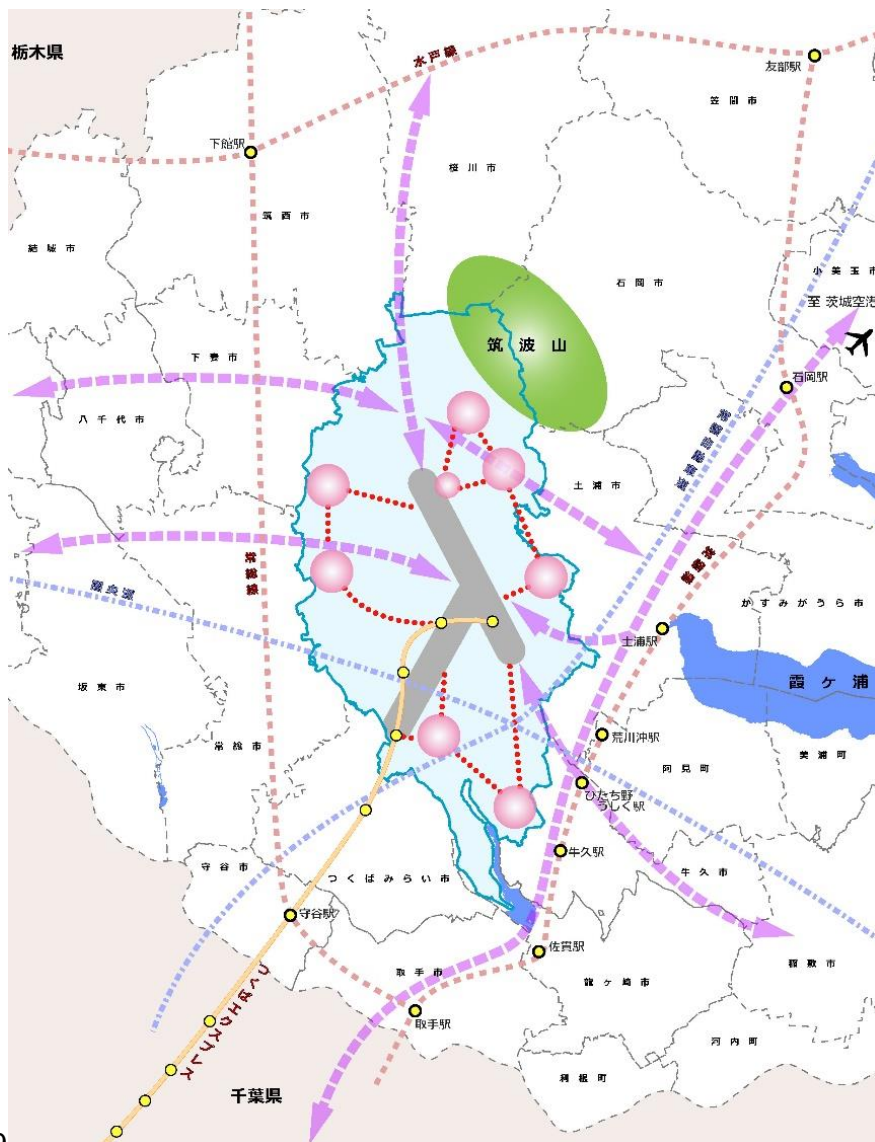
つくば市の土地利用にあたっては、首都圏や茨城県における役割を十分に考慮し、広域的な視点に立ち、市の特徴を踏まえた持続可能な土地利用を進めます。

特に、今後も長期的に定住人口や交流人口等の増加・維持を図るため、田園環境をいかした緑豊かでゆとりある魅力的な都市環境やつくばならではの新たな魅力を創出するとともに、新たな産業を創り出す産業創出拠点について整備を推進していきます。

豊かな自然と都市機能が調和した ハブアンドスポーク型都市構造の創出

今後の少子高齢化の進行を踏まえ、将来の集約型の都市構造への移行を考慮し、研究学園都市地域とつくばエクスプレス沿線地域をつくば市の核（ハブ）として機能を集積し、従来からの市街地を生活の拠点としてハブとの連携（スポーク）を考慮し生活サービス機能の向上を図る「ハブアンドスポーク型都市構造」の構築を進めます。

※ハブアンドスポークとは 航空や物流業界などで使われている言葉。拠点空港から各地域に分散輸送する方式が自転車のハブとスポークの形状に似ていることから呼ばれている。



【図13】ハブアンドスポーク型都市構造

2 目指すべき都市構造

市域に「田園都市ゾーン」、「田園集落ゾーン」、「自然・観光ゾーン」の3つのゾーンを設定し、それぞれの特徴を踏まえた魅力的な土地利用を促進します。また、ハブアンドスポーク型都市構造の実現に向け、ゾーンごとに拠点性の向上を図ります。

①田園都市ゾーン

研究学園都市地域及びつくばエクスプレス沿線地域、産業集積地域からなるハブアンドスポーク構造のハブの役割となるゾーン。

(ア)地域

- 研究学園都市地域：筑波研究学園都市建設法に基づいて建設された研究学園地区や関連する土地区画整理事業によって整備された市街地
- つくばエクスプレス沿線地域：つくばエクスプレスに関連する区画整理事業によって整備された市街地
- 産業集積地域：工業団地として研究施設や生産施設等が集積した市街地

(イ)地区

- ・ つくば中心市街地地区：つくばエクスプレスつくば駅周辺
- ・ 研究学園駅周辺地区：つくばエクスプレス研究学園駅周辺

②田園集落ゾーン

田園都市ゾーン以外の市街地及び既存集落。

(ア)地域

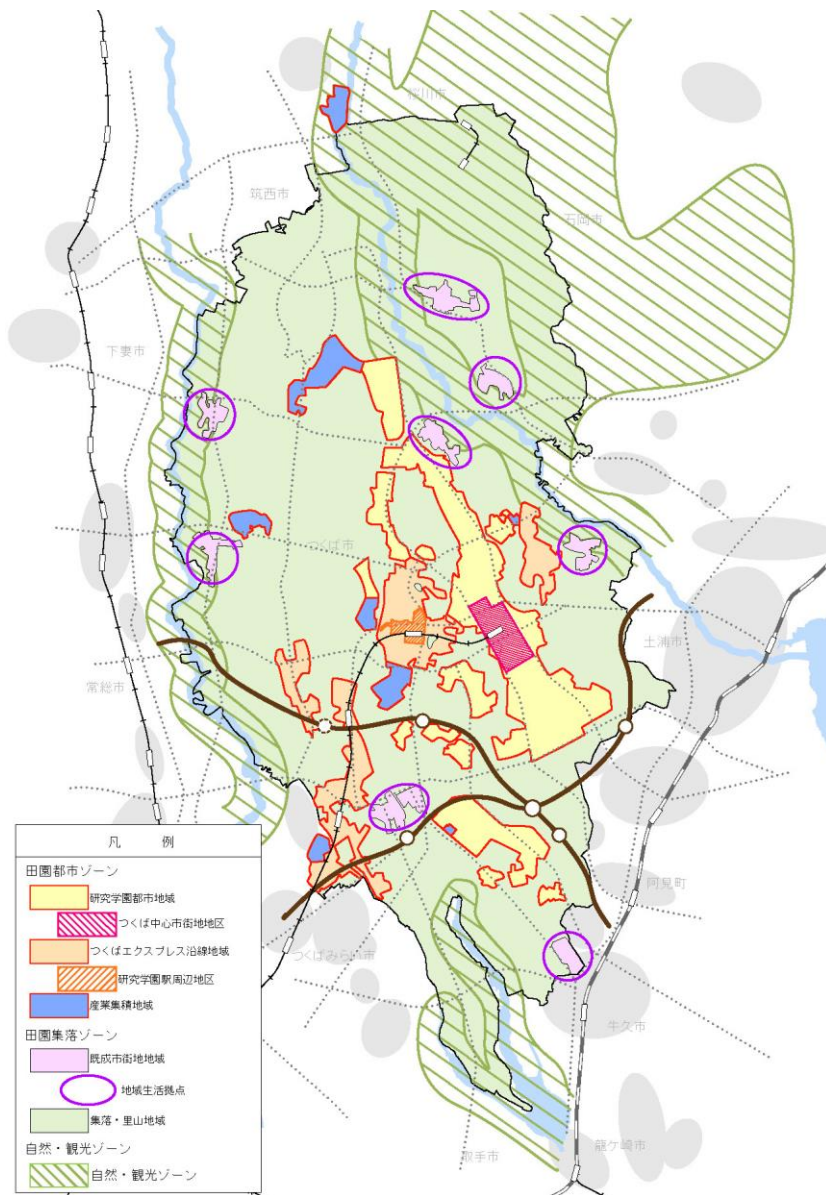
- 既成市街地地域：合併前の旧6町村における地域の中心として発展してきた市街地や土地区画整理事業によって整備された市街地
- 集落・里山地域：田園集落ゾーンのうち、既成市街地地域を除く地域（都市計画法に基づく区域区分が市街化調整区域である地域）

(イ)地域生活拠点

地域の中心として日常生活に必要な様々なサービスを提供できる場所

③自然・観光ゾーン

国立公園を含む筑波山系の山麓地帯と小貝川、桜川、牛久沼沿岸の地域



【図14】土地利用構想図